又人のもとふ文をる返事
もとにおくりおくに須土の浦よりまる兒松みつ
かるら人のとにより人に文のりさうら
もなんといへるよりてをこうもの紙とて
忘てをかれる文を神ろう社うろうれ
とゝへるよわすれ」ぬりかくいへるとて
我をとかめてぬまき人文をるおかをぬ人をうる話
人よやもろる返事の紙を給て
小倉山ぬこらめてる道をて海る話文そをかをう
おもおとゝ人のもとふ文やりまとて返事に



ねて
数のねをつきれまてなるゝ君といふとて思ふ
とのる玉へまとあまて
よそ人のなまく歌さハ何のて恨ん神よ年や何をむ心
人よぬをるとる返事の紙給
歌ものまて
まつの松こと□まる歌ひ我ふる袖まて祈りて
かるらの人おきてそとをめるうみてをも事
しまてまたうとやる返事にる用うり
まやあうぬん

舟かな」と音なひの山ぶところある神の裏を書ある
人々あまた招てあるじとせらるゝ
折ふし秋ま近うして鳥のこゑひるのうそかに
きゝよし
このひとてあまたゝびのまゐ郷てふ
むまれまうかねすゝ
もゝうもゝのまれとこゝらねなつこひらなうこうろ
ものまゐのくいよ
すゝるうひとうかとそいるあをもそれ
うらうへのとにあひるいまゝあるよのふ





なゐくこのあゝうみはそかくまもそれいよう
そうかんまひとそいるあをもそれ
てみをゐるよゝひくかくいへ
三笠山このとれのそうかうあへ
とのまゐかくまゐる人はをあゝとて
ゆくへてうひもなく三笠山を海ま人おまう武
ある所の奇合にあのの名をとよる夜るう
秋風
夜ふる秋の初を吹ま
うみち



国立国会図書館　タイトル『群書類従』 請求記号 127-1
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『群書類従』 請求記号 127-1　　ガラス使用

[illegible]のことに日ごろふんすい
[illegible]そかくいひ
世とうとくその山路よる人のあ
かくの如くれたるうや
[illegible]
開すべかき法めてる八千草れ
すてる女のたくさまる
ゆいすたるうむすひなる
年ひさしきまゐかくひて
たのる君へ

いそのつゝ結ひとゝそゝえひ
ある女なのもとにゝめて
うことのはゝめうみゝ
むかすかねよ松さ
みゝれ答ゝ成うる
ら後うなひてもとく
動女れとゝまいそゝ
ひる
字と人ゝまゝるゝ再後ゝひのつゝ
返ー





国立国会図書館　タイトル『群書類従』　請求記号 127-1
ガラス使用

歟ゝ日と云のうひの松ともいはんあまた女のもとに文やるとてなうてなんとそかるといひよ毎
世の中の人乃ちふかき恋をもしらぬ人のたゝ
面よのもとそかるゝ人のたゝわろきやうに
毎ゝ
いつともあとふ恋もしぬ人のみ
をんなへ
よそをも松みやま三輪の山何事に人のたいわる
五月ついたちれ
雪とそゝ
あまつ雲の八月のやれうれよ雲はそ光みそゝ
松ゝ月乃ふに志ゐの紀の朝臣のもとへ
ゆまこゝのあそにようて
昇う称てひくへきものと菖蒲をおひうる
馬えう称すゝひて経あ
また日ふるひかるつゝ
山のそれ月まてのゆをやひく
とゝまちつる松ゝ
雲よふると芝いつる月歌やあるは

人〻ありてなそらへうたひ
かるた紙雛ふりけてみつゝ庭夏草茂れる
心のある女のれうとまるかとおもひ
よ物ひとまきとるうたひ
うらにとそいまゝ女
獨してかゝる舟のを紀行文ゆかり
やまゝはれとるくありくと心
ようのるとねをよけて
風とやみれとるをつゝ浦なるれ舟と
ける女よ物ひとそめてなる田舎人とうも



とこれひとゝ物ふやしきたひの日とう雇
ゆるなんとそ
ひかまく成その後ふ秩をあ
人ふなれくあ月よいひ
祝そなるうる公何ふまや新
ける人のをとにいまそ
なるハをるふいひ
つる人をよそる
ふとうあをそれ多人釣舟
おとこある人よあるなたらそれをなる

そてかくとこの人の斉書そもる巻数
あるれこれをけとも伊勢
ある所の記録ぬのるよ櫻のさるまれ
下に水なる人の家ようう女のるこ所あを
花さる木の下み流むすひのまてちるを後の歌をうん
心けるる人のもとにそ
あるこそまいつくれせそ
ふるかくひやる
とれの里とみまて夢そなくへきゆてなるる我名
三月にこうにうてそれめくきとよ
憂夜ふるへに門鳥を祝ろうる暮ゆく春の名ありをする

尤大后殿さうひょうん所ようかるものと
おりきなる枝つくらまてるにるまて
あるそいてさまるつもつ
ふれる所ことるのいなれ牡へうんるれ
三月廿日よりひるるまへまりてんとて女房
よいる夜こそ
ちるる山のさこ所ちさん春ぬらかくもそや
ちりめる女ろ
思ひてこられ年成志のさる
夜深くこうへ人おまるかよるに



国立国会図書館　タイトル『群書類従』　請求記号 127-1
ガラス使用

やうくいあまさへ人をかたらひて春ふすまと道ときにあり

長本寺牧本作哉

正月ついたちに人くあまたきそひて
梅のえだをおりてかざしにさしてうたひ
かへりけるに人をいるとて春の夜の
花のえだに名大将殿のさうしの
内よりおもてに雪ふりすさみ
乃苑とうたひてをいでんと
あるにいでまうくれ

濱松の宮ばらの茶屋にてうたひ
ものうたひけるに人くあまた
ありけるに
君代のひさしかるへきためしにも
松ならなんと千歳殿
千月見ばやまつもろくの演芸ありて人
とあるにとて人くようくまかり
ぜるにいさゝかありて人くをとりて
君代のひさしかるへきためしにも松ならなんと千歳殿
松ならなんと千歳殿の女御の
もとにてうたひけるにまことに
松ならなんとうたひけるにまことに
松ならなんと人くうたひける花をいつまで
もあまたと



国立国会図書館　タイトル『群書類従』　請求記号 127-1
ガラス使用

ろう人をおき山里にまく梅ふりすてる歩ふみそめ
二月ねおふけるに院の召日とおそいなるを
ゆきもせんおうまをそうひとく
聖よそそひく松のとともに君をちよ経ぬる
おもひ不まそ二月十日ゆきもる承れ花いまおも
しろうんと思うおりおなとはうられ当
人よいひおもをく
大うる月松の花を咲おんまき
秋宮のおりおなへふる文所のいとまうり
おまて人歌をみをおくみまに三月十日そう

又まうこをおもしろうさせうろう神の
かまうる後見えく
おまに今庭の櫻ちく次ぬめれ神の色うへてあり
右浦親集為定ら為秀ら面自筆を一字不違
令書寫し再往加校合若也
寛文六丙午初冬仲旬

右条主浦親集雖不審多依写経年不能按也

国立国会図書館　タイトル『群書類従』 請求記号 127-1
ガラス使用

大藏卿行宗卿集

長兼元年十二月　灸上し後隨思出書之

山花未綻　大教院作

山深まきの戸をとぢて

山家早春　圓融院

何方へ人とも云ん道もなし

五月十五日依忌日罷向仁和寺時師頼朝臣許

より

おもひの山もさこそ



国立国会図書館　タイトル『群書類従』　請求記号 127-1
ガラス使用

郭公なくなくにいとゝしく
八月十五夜中将國信朝臣許よりと
我こゝ君をやまとやおもひあるらむ
月影のおやそにかなしき
鳥羽殿前栽合
落
ちるよりもなほうらやまれていろづける
萩
物とこに秋のくる風の音ぬまも
晩見蔵菊内府
いつとてもきくにあやなき菊なれど
葛藤 同
いかそやの源氏に似るものゝ
止宿草庵
おもてこそ草ぬいりにもりけれ
忌辺
志のつまとかまにうち我ぬいも
女のもとにつかはしける
つゆともおもひさるゝ人や人と

雫島 忌 大平

もろ人とうまつりつる人のかずとも
関路月

月影をたよりわたりみそ今霄すく生実のをしき
和雪山寺

和雪いそ能野のうにうつろひしまのみれ雪のうきに
風中擣衣 堀川女将會

遥をよそ我も衣里のかり衣我着ちくらうつ
五月一日 関郭公

いつのまに里もれぬ郭公なく
落花満樹

岩ふちをいかに咲けまりそ岸よそや
地下そそ人もし時

雲井よ海さやめる床いよよ心からそ白みの色
土御門の内裏の陣もそ以雑雅兼朝臣宿衣の

もみく
よそ白もあぬ掛を等めをそ春のあ雪の
くへ風みるころ

此ろ我屋花をおく風
皇后宮 秋院ろ

[illegible]と申して三月つごもりや雨のふりけるに
[illegible]ふものもかうてはふらじ
[illegible]
いふかひなくて立ちくらん神ぞ知るらん
[illegible]
[illegible]
さうもなくて[illegible]
六條院そこにおはしまして
[illegible]女房たちいひ
[illegible]
[illegible]
あやめふく[illegible]

かへし

おもひやれ雲井まで[illegible]
法勝寺建物前の花を
[illegible]

故々へもちくる[illegible]道とだに
白川までも[illegible]伊勢へまうで侍
[illegible]
氷遂報結 鳥羽

[illegible]
鳥羽殿[illegible]暁[illegible]





国立国会図書館　タイトル『群書類従』　請求記号 127-1

ガラス使用

つゐに
さらめやうみとらいそて時ならぬ
雪
夜とすこし降て侍とて後郭公
同人とともにうみくうちをはこえて
いつこともなう
雨とさうれとの葉ことに聞ます
うへ
なとさうる風のもうとありて
歌仲朝臣のもとへ扇と
ともにつかはしける
ふきとふてあふひしてとやう
りう
ふきとをる風の扇をひけはまた
日ころ伊山里にありてまかりぬるまとに人の
我扇を渋茅の原とあまたふりて鶯のなきぬるを
宿竹
岩の作島や松そこに志めつゝんとをるなゝ枝のみあるは
熊野のみちより使

一

あてなる淺茅ふすまをおひそむる初ね山路は袖ぬれて
鮭聖のみちびきて谷ふかくわけ入る程
よ絶ず伴りしのとをくに夜ぬきて
いかのうへよ月のさしいでゝ
山路まで送れるまよ中にて月をあれ
九條民部卿家に参會よ夏月
月氷のうへ氷と明ゆく空を松ふく嵐
圓宗寺に宮の御ともふまつりて花菜述懐
色人ぬ緑の松よおとそふん

四位侍從宗忠朝臣還昇したりと聞く

うちまき雲おもはし立人ぬ
あそれるるたのしき
袁そ我とをとりしまよ車とゞまる海
仁和寺よそるうち
うち絶そそくもる
昔代のみかきもる丈夫
すみま成

わまてふもあはう紀者の淺茅生にすゝれのふそ
堀川院御時宮女房殿上人おとに仁和寺ゟ

こゑうてきゝそめみちのくにうたに称せらるゝ
ゝゝゝゝゝゝにてはうらう
いく年に我なりぬらんと旅人の花みる春にそ聞ゆる

憲舟院

はるゝ公なくひよ逢てそ歎あるる

葵

秋代もかさしてそいまさくらの
白河院法華御八講の時花契多年といふ事を
よう

月こそはなくはるの公こそ物思ふとの泊とこゝろ

返

月みくもなくはるの公こそ物思ふとの泊とこゝろ

遠尋郭公

いとかくはるの深さこゑほとゝぎす

停舟見花

はの春いのちかくしてよ櫻花咲る鴻とふ人を

僧正浄許より八重紅梅をこせまいらせ
とて

こゝろとゝめ

返

こゝろとゝめし梅の花とも

僧正

なんどもおもふ心ばへ恒例の事なれど
内大臣殿の折櫃よりとて
てまいりたるをとりつかて
雪やまさりそけんさしくみつゝ
返し
さしくみてたまはる雪にいや梅の
内大臣殿南庭花と題
君すむ宿のさゝ小竹ゆきにいや
返し
名にそ立る春近の山さくら



宮の内経よりそ
千とせへて君にひかれん春ごとに
返し
月六日にる女のもとより菖蒲草やりて斬まゝ粽よるに
そまにより人をたひく佛ふみ乃
五月六日にる女のもとより菖蒲草やりて斬まゝ粽よるに
はもとをかりそめのふしとおもへ
返し
かりそめの契よかまくらあやめ草
梅花當簾
梅ゝれをまつ匂よりこのそきて



国立国会図書館　タイトル『群書類従』　請求記号 127-1
ガラス使用

ふまこ紙等の事又乃勅つとそて三条のうひの君
れまとより
ふとて紫のとひらふき免門梅の匂ひの重てなりし孫へ
都芳門院かくまさせ給ひくつきれあき
ゆきへ乃清水の萩とうんて
萩うゑもあり白ひよ咲よりうかり秋の雨をはるう
返し　堀河殿
みるひよ雪ふきうき萩うゑ折を新に何ほとん
三月晦
東路や雲のいつぬこたちへ春やあるん
ふあしへ人かてるる月春よりそあひるやうやしれと
ひろのとまりとよ雨有り　橘のありろくさ
ゆきとみる
櫻花ちるやまくみ雪ふひそ
鳥羽殿まて月のあてもり都芳門院女房
ななうり
ひろの原あの事月歌の秋をふそて聴きるん
返し　冷泉帝更殿
そよも寒いくそふ月ふなる光とれる秋のそらん
長兼元年十二月廿四日雪胡當歌院の御前



国立国会図書館　タイトル『群書類従』　請求記号 127-1

ガラス使用

[illegible]
異作の雪ふりつもりたるを
う色ー　義濃 仲正女
[illegible]
同日大僧正御行へまゐりて
もゝそぢ[illegible]
[illegible]
[illegible]
へー

[illegible]
六條院まゐりて月のあかき夜女房ものうちにひき

天のとりまかきふりつもれて月のうへー
五月雨
五月雨の数もつもりて我宿も
燈火
うつゝ共[illegible]
述懐
[illegible]
雪埋野徑
[illegible]



国立国会図書館　タイトル『群書類従』 請求記号 127-1
ガラス使用

恋

人もまこの神よ泪とゝまりせよ
その渕の水やはさゝん

山家春暮

山さとはまきの煙の春の色も
ものさびしさの加へてぞ立

花前述懐 平等院會

咲ぬれどもをみるひとなき
身のうきことをなげくはるかな

墻根皆外花

垣根とて春をもしらぬ物とてや
よそのみ人の折てゆくらん

田家秋興

月こそはいつかの風のあとなれや
稲葉の露に殘る夜の影

水風晩涼 仰時朝臣會

久さまにはや川のせの風ぞ岩こす浪の音を添へつゝ
長門うへまでうちに佇ひて
涼りて

さまかうと今日くれ果ぬ遠き山
周防のかみうと申し所より曉うたり

舟ちよばかちの川波よ夏さ
落花埋庭 皇后宮會

散のこるえだもうつもれ庭のそら
月照衣

雪うちそゝぎ夜とともに冴ゆく月の影は
郭公毛掃院
ふる里のつらゝも心郭公まつ一ふし五月会の御綸旨
九日雪みる事
七夕のあまの羽衣なれぬれや月よりにとも
成通中将のもとへ遣いける
まちまちさりにうつろひつゝ
命にのまこともあひそんれさにとも
うき身

あるにもあらぬ心のなぐさめとも恨ぬそとも
祝 恭賀院會
君が代のかたふさそへて千年とも
おほらうさとろさよまでもあるへきのきふ
人のあまたあいふ恋のまよひ
さまざまふかさらん歌を聞ものから
郭公明月右近馬場
名残なくよくれ行空のまたにすめる月の秋
待郭公
ふるさとをいまやまつらん郭公

[illegible]
雁渡る人[illegible]
[illegible]
[illegible]
物おもひよそもそれとくもる山
おまつ秋みそかに
もの思ひ[illegible]
暁射及暁
[illegible]
雨後野水
[illegible]
草花告秋
[illegible]
慰院
[illegible]
月同
[illegible]
恋同
[illegible]
長兼二年十二月廿二日尋院卜定次日書[illegible]



国立国会図書館　タイトル『群書類従』　請求記号 127-1
ガラス使用

宣旨ノ仆

仕ふる人の柿葉ずしを贈ハイ

返ー　宣旨越後

美代とさしめそめて柿葉にも

春日野若菜

かすみゆく八十氏人の若菜とや

鶯笋ノ猶稀

営ふる我ごとく一つ色ハまれ

うく初音をたにはゝかん我着ての雅よ海

春ごとのあるにまかせて

侍従中納言ゆきなり物ハうすく

ふるさとの雪の初ものゝれとよ

ゆきより百氏人を初ひら物を

安藝ノ權守敦經故沖ゆきに身ふるの経年深く

川魚ノ初ものゝ物あるを

返ー

羽ふるゝ鳥ゝ春ハ運ぶ海ちゝ

五百ちふるゝ春ハ運ぶ海ちゝ

おとゝして



国立国会図書館　タイトル『群書類従』　請求記号 127-1
ガラス使用

いつとれをいふをれ言葉といひあつ
返し
あくれてふことをのれまひまうし
祭還日神館にて秋院宣有仕
うくはうこれくみもの外のもいまをれうまひ
うたの限あまいふる人とかうる河まと例あまん
末憐入道をとられてえのとし
別るゝやをとうる秋ふうまを秋
返し



あやめ草別をまふあもとふかまをれさひまもる秋彼
藏人信範う西あまを秋やあるといひしう
所れうまにあるう菖蒲の長まを秋う人のに持そ法う
正月七日同権権守雅重わるか河みとれそ
うち秋に君うとひの発やまかの色々差葉を
返し
発乃のうみとせよりみついに教とう君う西河ん
教経権守をとうる梅のうるれちとうる
すうれをのみうくく
ふまをれ夜れありにをとれて若葉の梅れ秋る海を

花はさそふ嵐とともに梢とふ今朝うぐひすの
保延元年十一月十日新院のおほせにて
のさめぐ\よそほしくきれもりしそ宣旨下へ
手とせをいつ\\\

同年後九月経定朝臣家ニ会ス 月

女郎花 悲

雲ゐまでそみとりそめてにすむ月や玉津しま女のかくる嶺

女郎花もとめぬ方の風ぞふく我恋ゐ手ゐの石ゐ松ゐもこのごとく

保延三年侍従中納言許へおとづれはべりけるに

ひとりのみ

中納言

きみなくて君ゐ松ゐもみるかひのあまのとまやとたてる人のすまゐ

返し

ゆくかたのなぐさめにこそ有べけれ身にあまれるねやとたてるは

又中納言かりそめに二三日ありて

きのふけふとみつつぞ人のまつ浦をみるかひ松ゐ人しまつ浦

返し

中納言

かきつめてなぐさめがたきものゆゑにまつ浦山城やまとをもにほふ浦

又二三日ありてそうやうあるべきよしありければ

鬼のおこ龍の啼のみぬるまてそ

返し

うとのおこ龍の啼と歎せるを自浪のうちあふすまをいかに

同よりはとうとしてよりてときこえ

うへ
老ぬまに野へのまつ風もとつて見ばや
木幡へ道いまもとめてもありけり
多まつそまのときそめ大納言
まへ
大そらのうき雲をつそとしくれて
拾遺抄うきそれくさ
みな瀬のおとろくも世まに流るる
松の木丸井小橋の詠
おもひ海る松のねよものおれく花も
仁和寺おそりけれさなくてすぎにけりあり
あやとのそれくめ
てれこをそり
おもひそかうそり
巡
玉まきそ
瑞賢うをそうそり
いそりは
へ
いそりは考へよひそや

女院中納言のつかはしける

[illegible]

うはそらにうき中納言敦

[illegible]

[illegible]

[illegible]

女院中宮と申しし人のもとに

[illegible]

咲そむる春のくるるもなくまそ秋の

[illegible]

[illegible]

おなじ年の秋の宮のうち春をいたみ花さく人自ありき

遥望山花　寄述懐恋

よそのみに雲井の峯をさそ花布くと見ゆる白雲

我ことと人のつらくも思ひなせ別まさらぬ物思ふ身は

きりしかなそれくに

志賀の浦にそそぐ水茎のあとたえぬへき恋歌大輔雅通のよりもありしかとも

しかと見えすなりしは

心ゆくさまそ思ひにあさりける花のさかりを

安永行忠　乃至名字未詳

世こと色て名くさ法ようれくいひくの名
阿弥陀経　水鳥樹林皆演妙法
池のる林のもをいそふかのよれもの
南面の檜くれのちりたるとみく
いなれいう須弥山もちりつい庭の雪とみもん
保延五年三月三日禁中にて孫ようたちて仕
しく成通中納言もとようう
おそろひやうくいろよりもうふうて
うへーはせて二三日はうあうく
そといまうて



為縁ら女法ようれ勝れおりよ所ようまで不歌ようり
椅夜とよみくる
きう為により秋長月れのるゆてうちもくるゆきの夜ふるん
来不留という題を
よひれまにそく入ようう何つれ何とて歌ふ事の最後
信解品　止宿草庵裏
きてそて等よいりに至うまのやうに
百首
春二十首
立春



国立国会図書館　タイトル『群書類従』　請求記号 127-1
ガラス使用

月まちいづる山ぎは
子日
二葉より松のひかげにたちそひて
霞
たなびくと春はみやこにたちそめて
鶯
めづらしく今とや雪のきえなごり
若菜
うちつけにかこそよめともかくもいはれて
残雲

初雪はふりてやとけてさえかへるらん
梅
春風のたよりとそ思ふ梅の花
柳
春風よいづくへまでか青柳の
巌
かく計のおとろきもなくひとり住
松
一枝もちらさぬ御山の風とこそ
春雨

春雨のふるまゝにとまりけり三嶋すぎくら海を見
去駒
春竹やきゝふるまゝにうとくなりぬ
帰厂
かりそめにうゑしつるくさの花の如くなるまで乃
水鳥
よるこゑもわかゝるゝまでいくたひか
茵代
萬代をまつとはしらぬ君なれとよゝの
菫菜
清水すむまゝにうもれぬ石みかも
杜若
我宿の松ふるえみかまてゝ
哥欠
萩宅
我宿の松ふるえみかまてゝ
欵冬
山吹のうつろふまゝに春さりぬ
三月盡
ちるはなのとゝまるへくもあらなくに
夏十五首

更衣

ころもかへ

衣がへ

卯花

うのはな

卯の花

葵

あふひ

山人

やまびと

山人

郭公

ほとゝぎす

ほとゝぎす

雲井よりくもかまくびのかりがねも

雲井よりくもかまくびのかりがねも

菖蒲

あやめ

菖蒲

ひさうみまくは鹿歩木毛乃津奴沼水よあやめを長く恨てさ

ひさうみまくは鹿歩木毛乃津奴沼水よあやめを長く恨てさ



早苗

さなへとりいそぐもみえてあをみたる

さなへとりいそぐもみえてあをみたる

題射

的

まとあてゝみるとりの光うすき

まとあてゝみるとりの光うすき

五月雨

さみだれ

五月雨

五月雨にかきまぜられて淀川のさゝ濁りゆく

五月雨にかきまぜられて淀川のさゝ濁りゆく

花橘

はなたちばな

花橘

我宿の花橘の匂ふさへ

我宿の花橘の匂ふさへ

蛍

ほたる

蛍

おもしろの道とやいはん夕やみに

おもしろの道とやいはん夕やみに





国立国会図書館　タイトル『群書類従』 請求記号 127-1　ガラス使用

數遣火

かゞり火もそこうかゝ人こゝろ我ひとそいつまでも

蓮

哥欠

氷室

いとひつゝ妻のもりこそ物かなしかりけり

泉

名遠くいつゝ出れ清水ひさしかりけむ

荒和稜

ふかみ草千とせ生けん命の魚ん川の瀬とこそなる

秋二十首

立秋

きよりかへ分くれ秋もれいとゝ我そそゝそろれさ

七夕

天河ちりたくもの今宵こそ人はひの星とけさや待ん

萩

よろ〳〵の曉つゆ小男鹿妻恋の下葉や色つきぬらん

女郎花

女郎花もの〳〵堅人のもとや枕と設き猶ひて寝

薄



国立国会図書館　タイトル『群書類従』　請求記号 127-1　　ガラス使用

見ゝとほきにいそぐ家ちの篠のそよぶ

折薗

乳まとと浪の森をも松まかるのやいそよやをれ紅葉ちり

蘭

きそみまゝ野とに旬の梅そ匂ふ海もまつうめのそらうまうる

萩

身れそとをれをひつとる名さの萩それの萩よそよ風也

雁

越路よりつのさ霧かくまとろる一人の旅ちうくもの也

鹿





ゝ秋そよりさ月そのゝ秋ひまもろ

霧

もろ〳〵秋も葉乃山とゝいふまてから紅葉深く染ら萩

霧

幾つそうまゝ花こもるかり金風夢ろとわろる窓のきはもろ

撫花

道乃人のそろかくまゝ松の撫子や人いろみろん

駒迎

五月原あらは雲井とかもろよ事絶とれる名月の初

月



国立国会図書館　タイトル『群書類従』　請求記号 127-1　　ガラス使用

九重九度さえわたる月影と氷をきてとたまろみさん

搗衣

かり衣き初んとともとやそ夜ふ里の里かあらし

虫

よ夜きく虫もとてなく出し淚や色そ露と風心

紅葉

ふるさとより志くれの色や深らんそおもふ色神なひのもり

菊

君かちよやとよろつよよふきくそ色へて匂へ白き花

九月盡

今ふくといそやもゝ草ゝ人もゝ世の秋い多く出もれ

冬十首

初冬

いつしかと雪もまたまろまろ薄れとも志もまろ

時雨

雲もれく志てまの色すまのまと記とろかとも衣

霜

夜もすからとるとも庵や菜とろやみとろ風

霰

いとゝしくいや祈とろ庵岡社等良乃柱とろ雲ぬるよは

雪

かきとゝ降る雪を袂のうちとゆひはなすと思ふ

寒雁

孤江よハをまねく芦乃舟

千鳥

ゆきかふ生てこの湊のさよ千鳥

氷

岩うとも玉ゐる水も夜とともに氷ゆるすそ

氷鳥

鴨鳥もゆきさゝへにはとのうそ風よと波をゝ





鋼代

きゝにくるもせつかう人ゆよみ思ひ波よりひて

神樂

夜もすゝ榊そゝりなしてなきぬ

鷺特

雪つもるかきねの竹とりの音

炭竈

あまそゝいとの炭竈やゝ煙

燈火

いとせんまろよりまろ埋火



国立国会図書館　タイトル『群書類従』 請求記号 127-1
ガラス使用

除夜

あまた行年いくつとも成ぬるおとしてや波乃も寄そも

憲十首

初恋

月草乃うつろう夜乃ふりはゆく

不被知人恋

君こそと今かさりとも志つゝぬる人乃うひ行くやはそも

不遇恋

いそのかみふりにしことゝいふまでも

初遇恋

ほとゝきす名こそ丸山をめそそゝいま建仮そうれ鈴

後朝恋

名のりやいもう但唯と思ひおそ言とまつの志ひてまん

過不遇恋

中くよあくたいのくゝ須川うきまし独や更ふそうもん

旅恋

むて玉乃よおと潜き旅乃袂うこ泥ていやハ狩うる

思

あまとおまも成ふる人のうらふれ乃

斤思

我ゑり抜とへ人ふまん
恨
ひとりそつまこの兒人とゐ
雜二十首
曉
きのふまてとゝもれる雪
松
何とまちともなくて白髪
竹
あら栄さも日も今年より風
苔
何とつらき人をも兒山中に
鶴
松枝よりおろす
山
梓弓春雨ふるよう物淋山
河
よの川岸を波のまくら
野
道もあさ雉子ほろ〳〵鳴て



国立国会図書館　タイトル『群書類従』 請求記号 127-1
ガラス使用

関

おいてゝ立入る人もなき秋ぞとゝ衣打

梅

春ごとに人まつ今はかひもなき

海路

志ほまつとまれとつゝむ舟もあれや

旅

松が枝を枕としも思ひそめ

別

つゆまでにちぎれるこゝろ成ぬとも

其風の便をそする



山家

山里にすこしのこれる峯ぬくる谷れの庵もとまるまで

田家

小山田とうへもまだき秋ぞそめ

懐旧

ひとゝせとおもひてもまた年ぬれを

愛

恋ひ寝のゆめとあふよもなき

述懐

いたづらに日ぬふるまゝとくやそ



国立国会図書館　タイトル『群書類従』　請求記号 127-1

ガラス使用

述懐

仲つ秋之末の方の久保ろ

祝

寿代はやも称のつくまでと志まし梅そひ伝へまほし

保延元年七月八日草花未遍

咲そめし秋の日数しあさえれかそそ白露の

寄露恋

乃至よ袂まさるな雲のゐる我そともさいひそへて

遠尋山花

よし丸山花のさうとすこさしと伏見の里と今そ思ふ





恋歌

いそせんう紀よの中にすまかまそ

郭公何方

仁の方とさそもろうれを郭公おの

月前遠情

月ふかれのひそおるを待しに支と郭公一人のこと

関路霊源

雪にとの庭そもろあいろし猶やそみん白川のせ

生釣恋

人まの小そしさ物し我をさいそろ





国立国会図書館　タイトル『群書類従』　請求記号 127-1

ガラス使用

羽鶴争齢

万代と君をぞ祝ふ鶴の毛も君のみ代には及ばざりけり

二首和哥海上遠望

霞波も明石のまとをみするせいかもしらぬ春の海かな

霞霓

遠とこも雲もむらくゝ見えわたるかすみの衣春やきぬらん

暁添虫声

夕雲にこゑそそめきすゞ虫の秋の初音をまつにぞ有ける

月添秋思

夜もすがら作らんまでは月歌よこらへてそひぬる



暁見藤花

むらさきの夕日かゝやく藤なみをかすめる春の色とみるかな

寄猫恋

あくまでのこひのもちさへ八猫なれどもての数にこひそへて

三月盡

行春にそれとうらみん花もなし散ぬとおもへば夢の心地に

名花の物とこいつゝ春とてもそれ迄千たびの春にこそ

憲

奥山の木ずゑのこれ行ず今ぞ春ゆく風ぞ吹なる

暁風告秋

夕風を海さこゑ秋のうら秋のくそよく秋ぬる

草花家邊夜

笠人とに名くよとそみさるれ家やそほんなやそほん

萩盛待庭

きくるの八村やおきんとそ萩包くん庭を逸しき

蟬夢満耳

夏れ日のこもこもこもこに明せこれ夢まきまき

あの山れきまき指ようのまきれきまき

扇不離手

うらまきうの扇のうを涼さに秋八きとまに思ふ



終夜風辞恋

下紐れうちとけねともみく涙も今宵もまに明つる

寝とすると山もとりまを重ると下紐れとうまの月ふわまをに分

湖恋扇

扇とん涼しまり風よくてうりやたなとへを発ぐて

影しく涙

いそしまうみ集恋まき旅夜ぎやりまくそとまん

菊花添水

吉野川岸の三つさく咲ようれ波よ色や海ふも

不逢事恋

初雪
幸海さに歌まの川妹まちよ
毎年見花
春ひとに折てをすくる野辺の色
月不知秋
秋の夜の月とみながら月よりも
田家秋雨

山里はつくさぬ人もうらけてと秋こそ雨を宿
林下時雨
もみぢそる木ずえかくるまで秋
行路雪
きびるよ物毛毛まいりませんこ花まんてもれ
寒雁添恋
雲ゐをかえる雁がねのこゑ
船中暁恋
明ぬとに漕て舟のこちらも我
うらむらさいこん原へ

七夕のあした　とうそひろけ　三首　やまこととさて

あひそめし男のそと思ふよいふ秋風　元大信家越後

四つへの風すれをうらみやめうとなれそ

死つまふとの月のうつくよ　元家

かきにうついてん舟まてとるまき海よ　曲

ちたのくるあまおとそ雁の我を為ふうへ

うた



かくみ一海川きてあれうつまて

ますみ月まにてうへ　これい池の水とあやまり

きりぎりすや夜寒の秋の川とを雨る

名物

そちるそいてやのまこうお人のあとへ

いうせんそちなひよひまいとをする

まきをのとふへうまる老そそ

久し　元

老のまいおいある人をあのもうとて





国立国会図書館　タイトル『群書類従』　請求記号 127-1
ガラス使用

人まつ沢のもとの名や今はきゝ
屋かき
山風のむすびまさりて
もろかやの
春草にいく夜の酒のとまりなら
ましかへき社もとめてや老まさ
らねな
いつくより人まち岡にわたりませ
白つゆ
いと雲た我もとめ給へ
ゆふもちろ



うれたる
うらみてかへるたもとかな
七夕
天河ほし合の星もとめてこそ
知死
あまのかはた荻はた葛も秋風に
乃うらはきて
老人屋ちぢの秋なりとへて
まろかり
白きぬへきあさのあさかれぬふる
ふみ


国立国会図書館　タイトル『群書類従』　請求記号 127-1
ガラス使用

ちさうてあくるひ
おもてゐのこゑうとうとしくきこゆ
るひのひ
旅ねいとゞひろ海うみ松ちらけあり
松のとをそくるとうしいさまん流をうれ
きれうまみ水ようよ
風ゆふ汀の松おやまもよせる波よ歌そこまく
夏草
秋ちかき萩うゑすうみとうめうふみとうあ



もゐ雪
あさち山紅葉ゆふまあ行ひとさかしかまつ波当れ物書
きの家れ秋のあも
夏ゆまへ門田れい稲をおろうれる松のまん
まやれをとの志ま
みとゆまへ対面てまう絶ろうまあ
寒雁増思
我恋ことに雪そも増る武雲松
はつめそうひを降さくく
雪ふ雪あるもよういりめと松ふ初れをうまさ



国立国会図書館　タイトル『群書類従』 請求記号 127-1
ガラス使用

行とうへもの雪なよくとも
申つけて生田もとりわけ涼
花下述懐
掃ふかものとういふ年とに我身ひとつをも
衰とも誰かみるべきなれどもとりまぜて
花ゆゑの涙の雨は色かへぬ袖をぬらすと
身ひとつにおもふことなきをだにかこつ
驚かすおのれ
一つ色に春くとも雪ふるその後よりこそ
天永二年二月十六日の内裏



いふまん氏の妻をまさ免す連れ行へとうみとをこふる
こうらうそも文のとけのあまれこのれんかうめて
とくにうたうたりしうめそつくとそて
かなれめてなるうひふとあ妻うら後めをよ
うへ
文乃すゑ
うよう君うかうめにうまりぬ人もあまきねをひうみん
うらへ
雪れうるさめをよに尋ねそ梅う匂ひあうそる
ひうへ
春雨よ何うさん雪ハ極の花をそそあう



国立国会図書館　タイトル『群書類従』 請求記号 127-1
ガラス使用

127
666
1



月あるころ夜ふくるまで物語などして
かへりまかでたるに月のいとあかければ
此道ばかりをやうてぞ行
と更よりのちまうで給ふ月のあかき
まゐりたる次侍りより
思ひあまりあひ見ぬ程をなげくとも
返りまいりこ
おもひきや逢ふ夜ありとは
右大臣行家公家集ニ濱田庚秘本校合



国立国会図書館　タイトル『群書類従』 請求記号 127-1
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『群書類従』　請求記号 127-1

ガラス使用

127
267
1

ガラス使用
国立国会図書館　タイトル『群書類従』　請求記号 127-1